



けんこうだより

氷川町では、血管の変化によって引き起こされる病気を予防するために、様々な取り組みを行っています。大きな病気を予防することは、毎日の普通の生活を維持し、好きなことを続けられる「生活の質」を守ることができますが、それだけでなく、経済的な効果も期待できます。実際に予防の経済的効果を検証してみました。

【この年に新しく病気になった人と医療費】

※国保データ支援システムより抜粋



病名	H25年度件数	H29年度件数	人数の変化
脳梗塞	61人	41人	20人減少
脳出血	11人	7人	4人減少
くも膜下出血	1人	1人	同数
虚血性心疾患	69人	61人	8人減少
透析	1人	0人	1人減少

病名	H25年度費用	H29年度費用	費用の変化
脳梗塞	6,494万円	5,620万円	874万円減
脳出血	2,094万円	1,934万円	160万円減
くも膜下出血	307万円	283万円	24万円減
虚血性心疾患	4,833万円	5,644万円	811万円増
透析	600万円	0円	600万円減

脳血管疾患(脳梗塞・脳出血・くも膜下出血)では、24人減少、1,058万円の医療費が減少しました

虚血性心疾患では、8人減少、811万円の医療費が増加しました

透析では、1人減少、600万円の医療費が減少しました

→ **847万円の医療費削減効果!**

住民健診のお知らせ

- 8月25日(土) 氷川町公民館
 - 8月26日(日) 健康センター
 - 8月27日(月) 健康センター
 - 8月28日(火) 健康センター
- いずれも受付は7時~10時

健診を受けて
ご自身の血管の状態
を確認しましょう!



【お問い合わせ先】健康センター ☎52-7154 保健師

町民文芸

短歌

秋吉のカルスト地形見渡せば
羊の群れにも見紛ごうほどや
北野津 宮本 末秋

夏盛り世界遺産に選ばれた
崎津の町の片陰を行く
西野津 古崎スエノ

梅雨晴れ間蝉しぐれの競ぎ鳴き
酢の物旨し舌ならず
南鹿野 尾崎 京子

陽の登る朝露煌らか雑草の
天然ダイヤの薄る消ゆ
西野津 古崎 栄子

台風と地震どちらもどちらだが
地震は不意で為す術が無い
吉 本 橋村 正之

あしひきの山のしづくに立ち濡れぬ
君を見送る氷川橋かな
北野津 井田 道寛

朝三時サッカー試合を応援す
惜敗なれば称へて止まず
吉 本 高橋 澄子

今さらに星に願ひはあらねども
短冊に記す一条の夢
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

「ゆるしてくださいおねがいします」
心の叫びが親に届かず
西上宮 村内 一誠

日々暮す世間の流れ変わりゆき
悲しく写す我が歳のせい
上鹿島 前村 俊子

俳句

大棕櫚の毛槍並み立ち八農高
北野津 宮本 末秋

ミニトマト我が家に実る「アイコ」かな
西野津 古崎スエノ

たづさえて定期通院帰り来る
南鹿野 尾崎 京子

夏草の刈られておりし野の小径
町 香山菊童子

風鈴の涼し音色の夏の夕
西野津 古崎 栄子

炎帝や島地八幡阿吽像
北野津 井田 寛道

花南天雨に折たれて散る朝
吉 本 高橋 澄子

待ちわびて咲きし牡丹の緋のしづく
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

鈴の音の庭にこぼれて夏料理
桜ヶ丘 吉田 照子

青栗の素顔ならべて刺やさし
町 田中 澄子

暴れ梅雨人も自然も闇の底
桜ヶ丘 宮崎トシ子

つばめの子巢立ちし後の巢の静寂
西上宮 村内 一誠

仏壇の新茶の香り部屋に満つ
上鹿島 前村 俊子

三島由紀夫… 生い立ち&アファカルト

法道寺 本田 花風

豊田貞子、ナイトクラブ「銀馬車」で由紀夫とのツーショット写真は公認されたものであるが、こんなに堂々とした写真を見ることは一般人には珍しいことである。昭和二十九年歌舞伎座、中村歌右衛門の興行の楽屋で由紀夫は一人の着物姿の女性と出会った。楽屋出入りができるのは普通では出来ないこと。貞子その時、十九歳。後日、歌舞伎座あたりで見覚えのある男から「やあ、先日は成駒屋の楽屋で…」と声をかけられた。これが二人の恋のなれそめであった。(岩下尚史「ヒタメン」…三島由紀夫が女に逢う時…)参照…ヒタメンとは直面と書き、歌舞伎で能面をつけずに舞うこと。貞子が結婚することになる三十二年までのことである。

この間、「沈める瀧」「班女」「金閣寺」「餓鬼船」「橋づくし」「永すきた春」「美徳のよるめき」を発表する。邦子から貞子、由紀夫の青春は戦争と戦後、心身に濃密な時代が刻まれていった。

「鏡子の家のモデル湯浅あつ子、後ロイ・ジェームズと再婚。由紀夫は「金閣寺」をこえる作品を書くことと考え、「鏡子の家」の構想に入った。通り過ぎた戦後の時代を書くことが主題で、四人の青年と鏡子という巫女に導かれ現代の地獄めぐりをする話である。

由紀夫と由紀夫の一家は、あつ子に結婚相手を探してくれるように依頼し、昭和三十三年三月、あつ子が伯爵家の血を引く小松家宅で夫人の姪にあたる日本画家の杉山寧の長女瑠子の見合い写真を見たところ、由紀夫はOKの返事、六月一日、川端康成夫妻の媒酌で結婚する。

は、あたかも緻密に計算され、整然と区分されたかのような人工性秩序の雰囲気とともに、憑かれた者の逃れ難い宿命の気配がつきまとっている。明晰、晴明な古典主義の意志と、一種物狂いにも似たロマン主義の放恣とが同居し、からみ合っている。その結び目の謎を判然と解き明かすには、まだかなりの時間を要するだろう。(佐伯彰・人と文学・昭和四十八年十一月)

三十六年始めに二・二六事件に焦点をすえた「憂国」を書き、以降ナショナリズムへの著しい接近を示した一方「サド侯爵夫人」など英訳を中心とした外国語訳がでて、早くも四十歳ころにはノーベル賞候補に上げられている。この数年後には「楯の会」結成するが、三十歳ころからボディビルを始めボクシング、剣道と肉体的鍛錬に集中するようになり、かつてのひ弱な少年は、筋骨たくましい三十代の成年へと鍛錬され(この事は「往復書簡」で川端にも伝えていた)「仮面の告白」や「金閣寺」に定着されたアウトサイダーの烈しい孤独を青春の記念碑として残した。三十五年の安保闘争など左翼的ムードが入り混じった興奮の高波が日本をおお中、皮肉なことに60年代わが国はかつて例のない経済的繁栄期となる。小説家として成熟期にふみこんだ三島が、たまたまこうした時期に行き当たったという事態の不幸、が三島の行く末にのしかかっているのかも知れない。

三島没後およそ五十年になるが、三島由紀夫の存在がいかに大きくなっているか、言うまでもないところだ。《参照文献…「仮面の告白」(「憂国」)／新・日本文壇史／国文学・解釈と研究》

あとがき…三島作品に限ったことではないだろうが、多くの作品論作家論・研究文献は読むほど分からなくなってしまう。パンザイするるのは必然だが、三島作品の本質や本人の裏側など、広報誌への記事にはためらいがある。ドナルド・キーンに激石と由紀夫どっちがノーベル賞に近いかに聞いてみたいものだ。